

山と博物館

第12巻 第7号 1967年7月25日 大町山岳博物館



自然開発センターとしての博物館

大町山岳博物館が開館したのは、昭和二十六年の十一月一日、と記憶している。あれから十六年、この博物館は大きく発展してきたものだとしみじみ思う。

物価値上りの折、この博物館の維持費も大町市という地域社会の乏しい財源では、苦しいものであることも察し、それだけにこんにちまで、独力でこれを守り、発展させてきた大町市の市民と、当局者は偉いと思う。かつて、この博物館の建設運動に参画した私としても、その主観的な愛着と共に、第三者の立場で見ると、大町山岳博物館の価値は、高く評価されるべきだと思っている。

全県的な立場から仕事を進めている過程で、マスコミや、人との対話の中で、「おおまち」という地域社会の名前を知らなくとも、「大町山岳博物館」とか、「黒部ダム」を知っている人たちが、全国に多いことはなせだろうか。

二十数年もの長い間、「おおまち」に住み、その人間と自然を愛した私の気持は、いままも変りはない。しかし、それだけに大町市が、博物館と、黒部ダムだけのようになり、第三者に思われていることを、私は複雑な気持ちで聞き入るのである。

いま、私の担当している仕事だけでとらえて見ても、長野県や、企業局、営林局、関係市町村と提携して観光開発を進めている地域として苗場山、秋山郷、斑尾山(まだらお)、鬼無里(きなき)、黒姫、乗鞍、御岳、南木曾(なきぞ)、桐池(つがいけ)等々がある。これらの開発手法の中で、一貫していえることは、「自然を保護しつつ開発する。」という原則と共に、大都会の人びとが求めているものは、ありのままの自然の姿であり、この傾向は現代の機械文明が進むテンポに応じて強くなるという点である。この意味で大町山岳博物館がその苦難の歴史の中にたくわえてきた知識と、資料をもっと活用するように、大町市民は勿論、国全体の認識をあらたにする時期にきているといえよう。

(長野鉄道管理局・市場調査室長) 阿部西与

餓鬼岳

― 静かな山行を求める人のために ―

平 林 国 男

餓鬼岳のある場所

北アルプス連峰中央部の東側、槍ヶ岳で分水された高瀬川と梓川の溪谷で分離され、南北に連なった山脈がある。この山脈は南から霞沢岳、大滝山、蝶ヶ岳、常念岳、大天井岳、燕岳などの山岳をつなぎ、北端は唐沢岳で終っている。山脈中の代表的な山岳名をとって一般的には常念山脈などと呼ばれる。北アルプス連峰の前衛ともいえる山脈で、餓鬼岳はこの山脈の最北端唐沢岳に南接する山岳である。多くの前山に囲まれその中央部にどっしりと座り込んだこの岳は、形のととのった

餓鬼岳小屋



りっぱな岳であるが、姿に似つかない。餓鬼などという名前がつけられている。その奇好な名の故に多くの人に知られてはいるが、この岳に登る人は極めて少ない。南に接する燕岳は槍ヶ岳への縦走コースの起点として、アルプス銀座の呼称のもとに多くの人々に親しまれている。しかし、北に接する餓鬼岳にはほとんど人が登らず、それなりにいつ訪ずれても静かな夏山の旅を楽しむことができる。でももある。

北アルプスの秘境と云う言葉がもてはやされるが、これらの秘境もバス道路がひらかれ、登山路が整備されるに伴って、俗悪な気風がみなぎるのおちである。ひとりよがりな考えであるかも知れないが、私はむしろこれら通俗的な秘境より、忘れられた山岳のもつ秘境の魅力に誘われる一人である。

餓鬼岳の生いたち

餓鬼岳の山体はすべて花崗岩で形成される。この花崗岩は常念山脈の広大な地域に広がり、北接する唐沢岳も南接する燕岳もすべて花崗岩である。これらの花崗岩は約一億年くらい前の中生代末期に、日本列島に起った地殻変動により、土地の隆起に伴う大量の花崗岩の貫入によって生じたものといわれている。当時すでに堆積していた古生層や中生層の下へもぐり込み、数種の地下で冷却固結した花崗岩は、その後土地の隆起に伴う浸蝕作用によって、今では上を被っていた古生層などは削り取られ、花崗岩もあらわな二六四七級の餓鬼岳が形成されたという。

花崗岩で形成された山岳はいずれも風化や浸蝕作用に弱く、常に崖崩れなど崩壊作用に

見舞われる。したがって山頂部はなだらかになつて峻立する岩峰は見られない。一方、浸蝕作用の激しい谷間は断崖が形成され、安易な気持ちでは近づきたくない絶壁が各所に見られる。激しい風化浸蝕によって土壌が形成されにくく、広大な地域に大森林が発達するようないことはほとんどない。これら地質要因は地形へ、さらにその岳に生育する植物や動物に影響を及ぼしている。

餓鬼岳への道

登山路は大糸線沿線の信濃常盤駅を起点として、乳川谷と白沢の二箇所、高瀬溪谷からは葛温泉を起点とした滝沢と東京電力第五発電所からの東沢が、中房谷からは中房温泉を起点とした中房川登りの五箇所にある。このほか主尾根を燕岳に抜ける縦走路があるが、燕岳から餓鬼岳を通って下山する者が多いから、餓鬼岳への道の一つに数えられる。これら登山路のうち整備がややゆきとどいてるのは、白沢コースと乳川コース、および縦走コースの三箇所である。他のコースはいずれも台風などの被害を受けたまま改修が進まず、山なれた登山者でも苦勞を覚悟で登山路を探しながら登らねばならない。もちろん滝などの高捲きは予定の行動時にはビバークの準備も整えた方が安全である。とくに滝沢コースと東沢コースを選ぶ場合は周到な注意が必要である。

なお、国土地理院発行の五万分の一の地図(昭和三四年修正測量)の信濃池田と槍ヶ岳の図幅のうち、大風山と餓鬼岳の鞍部へ登る登山路(地図では鞍部で乳川コースと一語になっている)は多少変更しているから注意していただきたい。正しい登山路は餓鬼岳から北方滝沢へ落ち込む尾根につけられ、一五〇〇級前後の地点で滝沢から登ってきた登山路と

合わさっている。すなわち、滝沢から餓鬼岳に向って左側を鞍部方向に捲き込まず、真直に餓鬼岳へ向って登ることになる。

餓鬼岳と植物

餓鬼岳の登山コースのうち最も整備がゆきどき、指導標やペンキの道しるべがたんにつけられ、コースとしても一般向(ただし健脚者でない)と推奨できないで、また自然の変化に富んだ白沢コースの登山案内を兼ねながら、登山路周辺で見られる主要な植物について述べたい。

信濃常盤で下車し、駅の南側より西方へほぼ直線的につけられている車道を進む、途中、小海戸、清水などの部落を通過し、カラマツ林の中に真直ぐ延びた林道に入る。道はしばらく進んで三又路を右に折れ、そのまま山足に続く単調な里歩きとなる。この辺は民有地でほとんど伐採跡地となり、カラマツ、アカマツなどが植林されている。

親沢との道と別かれ白沢の登山口に入ると砂防堰堤で林道が終る。この間約六キロあるが変化に乏しく日陰もなくあきあきする道である。駅前でタクシーを拾うところまで走ってくれる。また、清水部落(約二キロ)までバスがあるが本数は少ない。

標高一〇〇〇級の白沢堰堤からは本格的な登山歩道になる。川原の中の転石につけられた赤ペンキのマークをたよりに数回白沢の本流を左右に渡り、一キロ程進んだ地点(標高約一八〇〇)で本流を避けてつけられた捲き道に取付く。この間に見られる植物はヤシヤシ、フサザクラ、タニウツギ、アサノハカエデ、リョウブ、ノリウツギなど溪谷沿に好んで生育する種類や、川原の中にはカワラハハコ、ミヤマハタザオ、ヤマハハコなどが見られる。タカネコウゾリナ、ミヤマコウゾリナなど高山帯で見られる植物も下つてきている。

川原の途中から固有林になる。浅い山の林道に近い固有林は大抵伐採されている場合が



普通であるが、崩壊地の多い餓鬼岳では保安林としてそのまま保護されているため、溪谷の谷底近くに発達する森林の観察には都合が良い。

岩壁の頭や尾根筋にはツガ、コメツガが生育し、その間隙をぬってブナ、ケトチノキ、サワグルミ、ミズナラなどの大木が生育する。しかし、土壌が浅いためかブナ林といえる森林までには発達しない。落葉広葉樹林ではあるが、溪谷沿に発達する沢筋の植生が広がっていると考えても良さそうである。大木の下にはアサノハカエデ、ウリハダカエデ等約一六種に個体数は少ないがフウリンウメモドキなどの低木が生育している。下草にはモミジガサ、ウワバミソウ、ラショウモンカズラ等一九種のほか、シノブカグマ、クジャクシダ、オンシダ、イヌガンソク、ヤマソテツ、シシガシラ、シコウモンシダ、リョウウメンシダなどのシダ類が非常に多い。コチャルメルソウも多く登山路わきに芝生のように生育する場所も見られる。

このあたりから登山路わきやブッシュの陰にシウキランが目につくようになる。シウキランは標高三一〇〇m位から一四〇〇mの範囲で見られる。

本流を右に左に渡りながら巻き道を進むと再び支尾根を越して本流にでる。ここは魚止滝の高巻き部分にあたる。さらに本流沿いにしばらく進むと尾根登りの取付になる。右に左に折れながら登る道は「百曲り」と呼ばれ、後述する餓鬼岳の手前のダケカンバ林中の道のことをいう場合があり、どちらにつけられた名称かは確かでない。

標高一六二〇m前後の登山路わきにひっそりと咲くオオヤマレンゲの花は印象的である。またこれまでの道中気づく点はオオイトドリがほとんど見られず、葉裏に毛の無いイトドリだけである。同様にオオカニコウモリも見当らず、カニコウモリだけが目につく。ハイイヌツゲ、ハイイヌガヤ、ヒメモチなど日本海要素といわれる植物はいずれも極端に少なく隣接する高瀬渓谷ではしばしば見かけるエゾノズリハ、ツルシキミ、ヒメアオキなどが見ることができない。

標高一七五〇mまで登ると白沢の源流部へ出る。ここは切り立った岩壁の底が急傾斜の狭いガレになり、岩壁からはたえず水が落ちて流れをつくっている。ユキワリソウ、ムシトリスミレが見られるのもこの場所である。オオバギボウシに混ってエゾシオガマ、ヒトツバオモギ、ミヤマハンノキ、ミヤマコウゾリナ、タカネニガナなど高山植物が生育する。標高二〇〇九mで大嵐山の稜線に出て視界は急にひらけ餓鬼岳の全容が望める。今までの溪谷沿いに発達するような植生とも別れてコメツガ林に入る。といってもこの取付部分

数百mの範囲のコメツガは、台風でなぎ倒され果々と横たわり、林床のササが生気を取戻して広がっている。登山路に倒れた大木をまたいだり、くぐったりしながら稜線の登山路を進む。

オサバグサが出るのはこのあたりからである。コメツガの林床に標高二〇六〇mから二二〇〇mの範囲で見られる。コメツガの種組成は高木層をコメツガが優占し、オオシラビソ、シラビソ、トウヒ、ヒメコマツ、チヨウセンゴヨウが混入する。低木層はコヨウラクツツジ、ハクサンシヤクナゲ、ミネカエデ、オガラバナ、サビバナナカマド、ウラジロカンパ、ムシカリなどが占め、草層はゴゼンタチバナ、マイズルソウが生育する。

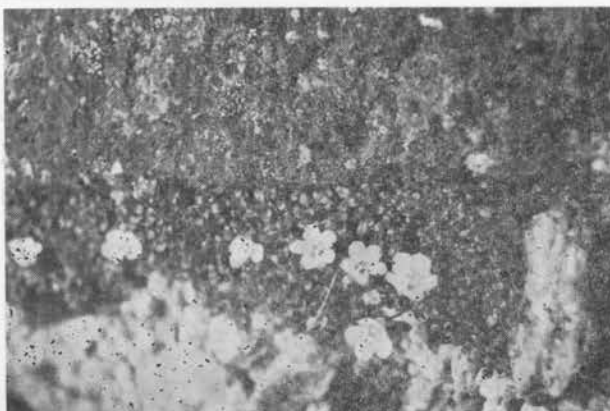
乳川コースの登山路との分岐点は標高二二〇〇mであり、ここから数十m登った地点でコメツガ林が発達できない乳川谷側のガレ地の頭に五平方米位のハイマツ群落が見られる。おそらく餓鬼岳でのハイマツの最下限であろう。

コメツガ林は標高二三三〇m前後で衰微してダケカンバ林になる。林中を曲折する登山路にそってオオバユキザサ、クルマユリ、クワトウヒレン、エンレイソウ、ハクサンボウフウ、オオバタケシマラン、タカネスイバ、オオバキスミレ、サンカヨウなどに混ってシナノキンバイが見事な花をきそっている。ダケカンバ林は標高二四八〇m前後まで標高差約一五〇mの広範囲にわたる密度の高い純林である。地形や冬季の積雪によって形成されるものであろう。このような樹林は後立山連峯や燕岳では見ることができない。

針葉樹林で後立山と異なる点はシラビソが多いことである。後立山ではシラビソはほとんど見られず大部分はオオシラビソであるが、餓鬼岳ではコメツガに混ってシラビソをちょくちょく見かける。一般に北アルプスでは南部にシラビソが多く北部に移るに従って少なくなる。餓鬼岳の西面東沢には見事なシラビソ林が発達している。長野県植物研究会では

今夏合宿調査を行なう予定であるが、興味の

もたれるシラビソ林である。ダケカンバ林が切れると標高二五〇〇m前後から本格的なハイマツ群落となる。登山路にはハイマツ帯に入ると山腹の下を等高線沿いに左に廻り餓鬼岳小屋(標高二五八〇m)に到達する。廻り込む地点の稜線には流沢コースの分岐点がある。山頂(標高二六四七・二米)は餓鬼岳小屋のすぐ近くで松本平を一望に収め、後立山や裏銀座、表銀座、槍ヶ岳など展望が広がる。東沢のシラビソ林は小屋の前まで上昇し、ここが森林限界となっている。小屋周辺から山頂にかけて乾燥地にはコマクサ、コバノクロマメノキ、コバケモモ、ウラシマツツジ、ミネズオウ、コマバツガザクラ、キバナシヤクナゲ、タカネナカマド、ヒメスダゲなどが生育し、岩場にはイワヒゲ、イワウメ、ツガザクラが、残雪期間の長い斜面にはチングルマ、アオノツガザクラ、ウサギギク、ハクサンチドリ、ウラジロタデ、タカネヤハズハハコ、ヒメクワガタ、シナノキンバイ、オオバキスミレなどが見られる。しかし、標高が低く高山帯の中が狭い上に乾性の山岳であるため湿性の高山植物や草原が発達できないので、高山帯の植物相はしごく単調となり惜しまれる。(山博・学芸員)



信州植物寸景

横内 斎

(その六)

ミカドノスキ *Miscanthus sinensis* Andersson form. *fastigiatus* Mizushima
いね科 ススキの変形、丈もやや低い、その穂の長さが基種の約3分の1くらい、茎も短かく褐色で光沢がある、昭和三十九年五月、天皇、皇后両陛下をご案内して八幡大池に行ったが、この一連の山地で発見したのでそれを記念して和名をつけた、帝王の意である。

グンバイツル *Veronica Onoei* Franchet et Savatier ヲノエのはぐや科 本種はすでに解説したが、その葉形が相撲の行司の使う軍配うちわに似ているので、一名グンバイツルの名があり、軍配うちわのように丸いのでマルバクワガタともいわれている、美ヶ原、菅平には多産し、信濃の東北部に見られ、上野国鹿沢温泉付近まで分布する特異の植物である。

なお私は昨年九月末、山頂にはすでに霜が来た頃四阿山頂上に登りミヤマゴボメグサの花色の違う一品を数本得た、すなわち同種の花は白色で下唇の中央に黄斑があるのに、私の得たものは濃い紫色の光沢のあるもので、花季も九月二十八日であったのに最盛期であって基本種よりおそいと思う、今後の研究にまつものである。

菅平の注意すべき植物を書いた次手に、この高原にみられる白花の植物の二、三についてふれてみよう、それも少し珍しいものを選んで、シロバナアマズミ *Erigeron Thunbergii* A. Gray form. *leucanthus* Hara ぎく科 この高原の春を飾るものはアマズミグクで、ゆるやかな芝原の斜面に、数十本、数百本、時には数えきれない程の群落を作っ

て、ミヤマアマズミグクには、間々白花のシロバナミヤマアマズミグクを見るが、高原のそれにはお目にかかることがなかった、それを今年の六月、四阿山の中腹で二株にであい、それよりずっと下の芝原中でも二株に出あった。

グンナイフウロは、普通花色は淡紫色が標準とされているが、これには濃淡があつて一がいにはきめがたい。ところで今年六月末のある日、これの純白色を採った。
シロバナグンナイフウロ *Geranium erio-stemum* Fischer var. *keinii* Maximowicz form. *Onoei* Hara form. ふうろそう科 ということになるだろう。
シロバナツボスミ *Viola verecunda* A. Gray form. すみれ科 ツボスミレの白花品種で、十数株が四阿高原に一ヶ所にひろがっているのを見つけた。

シロバナコケモト *Vaccinium Vitis-Idaea* Linnaeus var. *minus* Loddiges form. *Onoei* 科 これはまた気品の高いものだ。四阿山の中腹で登山道からは大分離れたダケカンバ、シラカンバなどの混交林のなかに、相当広い面積にわたって群落していた、道のそばではないから誰にも眼につかずにいたものであるが、私は三男文人が、この生態をやるのを手伝って見出した。

スズラン *Lysichiton camtschatcense* Schott 40センチ科 都人士に歓迎されるものに、スズラン(キミカゲソウ)とシラカバと、このミズバショウがある、これらの花信があると、それこそ猫も杓子も、老いも若きも、男も女も、道を遠しとせずしてやってくる、あの奇妙な形をした仏鍬苞が、雪とけ

の沼や小川辺に顔をのぞかせる、その頃はまだ葉も延びず、可憐なものである、それが日がたつて葉がのびだすが、条件のよい所では、葉の長さ一・三m、巾四〇cmを越えるのがみられる。この植物は、本州中部以北の山や、北海道の山の湿地に普通にみられ、千島、樺太、カムチャッカ、ウスリーに分布している、信濃では、北信に多く下水内、上水内北部、北安曇小谷地方が主産地になっている、この大群落のあるのは、戸隠高原の古池の山よりの湿原、上水内鬼無里今池の湿原、北安小谷親ノ原の湿原、白馬岳沼地などがそれである、南信での分布の限界は木曾開田高原新高国有林の御嶽登山口の細流の一带、塩尻市の、旧東筑摩郡片丘村の鶏頭山の湿原である、東信はどこまで広がっているか知らない。

これに葉の暗緑色の斑紋のあるのがみられる、かつて私は、昭和十何年頃であったか、友人の池田稷君と焼山、妙高山を縦走したさい高野の田圃の湿原で、これを見出し、恩師小泉秀雄先生に送ったがそのままになっていた、その後これをフイリミズバショウと呼ぶようになった、前記戸隠の古池の湿原や雨飾山頂近くの水湿地にもみられる。

チシマスバスミ *Viola Hultenii* W. Becker すみれ科 葉はうすくて円形、そして毛はないのがウスバスミレで、針葉樹林下に生える、ところが本種の方は毛が散生し、必ず湿原に生える、本州中部、北海道東部、千島、樺太、カムチャツカ、ヤクーツクに分布している、本州では尾瀬ヶ原が、その南限とされているが、今から十数年前水島正美理博と共に、下水内郡栄村野々海湿原に得た、ところがこは、その後排水口に堰堤をきいて貯水池となり、湖の周辺の一部に本種が、かろうじて生き残るという状態であった、その後下高井郡木島平村カヤノ平国有林の北ドブの湿原に見出された、こは幸いにも木も立たない所であり、しかも多量に産するので、まず絶滅の心配もない、本種の南限が二段とびでの

びたわけである。
42年度博物館協議会委員
近藤信 荒井好美 宮田富吉 久保田稔
洞沢昭三郎 西山たみ子 横川豊 山岸佐馬
次 平林勝 北沢善一 藤巻磐 荒井裕
福島忠雄 宮下深 山本携善 菅沢幸雄
富田清 福島融 青木治 下坂宣一
(順不同・敬称略)

上高地でカモシカを保護
去る6月28日上高地でカモシカが保護されただちに博物館のカモシカ放養園に収容された。
このカモシカはメスで右足首を骨折したものが自然のまままたくつついたもので歩行に不自由さがみられ、岩場など急峻な地形では生活することができず、低地をさまよっていったもので、北ノ遭難救助隊長の木村殖さんらによって保護された。
これで博物館で飼育しているカモシカは計五頭となった。

お願い「山と博物館」の購読者をつのって
おります。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

針の木岳 (爺方岳より)
画 斎藤 清

山と博物館 第12巻第7号
一九六七年七月二十五日発行
発行所 長野県大町市TDL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市下仲町
大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)